展示室はフィールドへの誘いの場。“本物を利活用する！”、そこにミュージアムの本質があり、地域の活性化と地域文化創出・発展の起点が芽生える。

千葉県立中央博物館　分館　海の博物館長　新　　和 宏

Abstract

第 24 回全国科学博物館協議会（2016y）の大会テーマである**「地域の核となる博物館～それを実現する資質能力」**は？と問われて、加盟館の諸氏はどう答弁するだろう。

「地域の核となる博物館」に関しては、昨今の博物館に期待されている新たなミッションと言えるから「当然そうあるべき！」と答え、程度の差はあるにせよ、諸氏は、このこと自体を大方は理解し、自ら（または館として）のビジョンもそれなりに有しているだろう。

それでは、「それを実現する資質能力」とは何かの問いかけに対して、明確に答弁できる関係者はそう多くないであろう。何故か？答えは明白である。

体現すべき事象に必要な資質能力は、その事象の数に比例するごとく非常に多岐に渡る。

つまり、「地域の核」と言っても「どのカテゴリーの核」を指すのかが重要である。言及するまでも無いが、このカテゴリーは単一では無く無数に存在し、当然のごとくそれを体現するための資質や能力も多岐に渡ることとなる。

Abstract ではこれ以上踏み込むことは避け、詳細は以下の論文中で提起提唱するとともに、当大会テーマに則した論説として、新のミュージアム論の展開と、それを体現するための提言を可視化する。

（1）「地域の核」にはどのようなカテゴリーが存在するか

ミュージアムに課せられた新たなミッションについては、2014 年の当協議会時の研究発表と報告書において新のミュージアム理論を論じたが、その中でも「地域の核」としてのミッションは重要なポジションを占めている。

しかし、Abstract にも記述したとおり、そのカテゴリーは森羅万象である。脳裏に思いつくままに列記するだけでも“生涯学習の場としての核”、“調査研究の場としての核”、“シンクタンク機能としての核”、“文化の拠点としての核”、“災害時の拠点としての核”、“情報収集の場としての核”、“市民の集いの場としての核”、等々、そのカテゴリーはいくらでもある。

そして、ここに事例として挙げた７つのカテゴリーだけを見ても、それを体現するとなると、ミュージアム関係者（研究者だけではなく事務系職員も含む）に必要な資質能力は非常に多岐に渡ることが容易に理解できるはずである。

つまり、当大会で加盟館の諸氏が議論すべき事象は、優に加盟館の数を超えるだろう。
その意味から考えると、当大会のテーマは、ミュージアムの経営と事業展開の全領域においてその根幹を形成している最重要課題と言える。

（2）各カテゴリーの体現に必要な資質能力の検証
・・・いくつかのカテゴリーより

議論の素材として、上述したカテゴリーの中からいくつかの事象について検証してみよう。

①“生涯学習の場としての核”

ミュージアムのミッションにおいて“学びの場”の提供は、過去現在の時間軸を通して事業の配分率としてはかなり大きい。それだけ市民の知への要求や未知の世界への探究心が大きいことに他ならないが、“知の市場”としてのミュージアムの真骨頂とも言える。
そのためには、各専門分野において高度な学術基盤を有していることは当然として、併せて、多方面の情報収集能力、そして、多角的な展開を可能にする豊富で広域な人脈を持つことである。
ミュージアムを基盤とした学びとして良く表現される“生涯学習”と“社会教育”のとらえ方については加盟館の諸氏には釈迦に説法であるため、ここで改めて定義することは避けるが、共通して言えることはミュージアムの資源はこの両者に有効に作用することである。この資源とは言うまでも無く、“ミュージアムの研究者であり資料（収蔵資料に限ることでは無い）”である。
これらの資源を学びという領域でどこまで効果的に機能することができるかはミュージアム側の資質に係っており、反面、それらの資源をどこまで活用できるかは利用者側のミュージアム・リテラシーの有無とその高低（能力は有しているとしてもそのレベルはどの位か）に係っている。

②“調査研究の場としての核”

学術研究の分野において、調査研究活動は各研究者が自らの研究テーマに即した各種データ等の収集とその解析、検証はもとより、多岐に渡る専門的知識等を得るための至極当然のプロセスである。ミュージアムの経営、事業展開は、この調査研究が基盤にあることが最低条件と言える。言い換えると、最低でもスタンダードなレベルでの調査研究領域に達していない事業は、学術研究機関であるミュージアムの正当な事業では無い。つまり、ミュージアムとして行う事業全域は、にわか勉強やその場限りの知識や情報で成しえるものでは無いことを意味している。
このようにミュージアム側の調査研究レベルは、しっかりとした専門的知見を基盤とした

学際的領域で展開されるべきだが、反面、地域に根ざした調査研究活動の重要性と有効性を忘れてはいけない。どうしても学際的なレベルでの研究活動では地域に密着した調査や情報収集は希薄にならざるを得ない。これは自然誌系も人文系も同様であり、正に地域学自体が研究面に提供している諸情報や地域の諸データは、グローバルレベルで研究素材を対象としているミュージアムの研究者には集約自体が難しいエリア（領域）なのである。

以上のことから、この両者の諸情報と知見、ノウハウ等が融合することで、研究活動は多角的、かつ、多段階的な領域に昇華することができる。

正に、ミュージアムは、研究者の研究母体であるのと同様に、市民の研究活動を支援し、市民とともに研究をさらなる深層域に誘因していく場と言える。

③“災害時の拠点としての核”

地理的、地質学的に自然災害の影響を受けやすい我が国において、災害時の対応やその情報提供は最重要テーマである。各地で甚大な被害を与えた諸地震をはじめ、台風等による風水害や土砂災害等は記憶に新しいところである。

こういった状況の中で、専門的知見を基盤とし、かつ、地域の様々な面での拠点として位置づけられているミュージアムは３つの大きなミッションを有している。

一つは、自然災害に対する情報提供である。地質学、地形学、地震学、気象学、そして動植物に関わる生態環境学等の各方面を専門に調査研究している研究者は、個々の知見を元に自然災害自体の諸情報を地域、市民に提供することが可能である。その情報は、時として地震のメカニズムや地質・地形学的な諸相であり、また、被害回避や被害縮小のためのノウハウである。さらに、昨今では減災教育や防災教育の重要性も期待されている。

今一つは、災害時、またはそれ以前における「モノを守り継承していくミッション」である。その守り継承すべきモノは、ミュージアムの収蔵資料に止まらず、地域の有形・無形、指定・無指定の諸文化財である。これを体現している事例は、地震・津波等により被災した諸資料のレスキュー活動であり、地域の文化財等を活用して展開される文化財保護の啓発普及活動である。

そして、３つめとして重要なミッションが、自然災害時の緊急避難場所としての機能である。先の東日本大震災時等においてもミュージアムが帰宅困難者の一時避難場所として機能した事例や、生活環境が復旧するまでの避難生活場所として機能した事例等を見ることができる。

以上のように、災害時の拠点としての機能には、学術的専門領域にあることによる研究者同士の横断的ネットワークを活用したレスキュー活動から、地域に密着した施設であるからこそ実現可能な役割まで、非常に多岐にわたる機能がある。

ここでは上記にあげた各カテゴリーの中から３つの事象について論じたが、既に明白なように、他のカテゴリーである“シンクタンク機能としての核”、“文化の拠点としての核”、“情報収集の場としての核”、“市民の集いの場としての核”等も全て密接にリンクしていると言える。

（3）研究と学びはフィールドにあり！
箱物ミュージアムの限界！！

改めて論ずるまでも無いが、研究者にとってフィールドは調査研究エリアの主体であるが、併せて、ミュージアムが展開する事業の全領域をカバーするエリアであることを再認識せよ！

研究者は、フィールドを舞台に、サンプリングをはじめ、対比（比較）調査、悉皆調査、聞き取り調査等を行い、研究素材の収集・集約を当たり前のように実施している。これらは研究プロセスにおいて普通のフローである。

そして、ミュージアムのもう一つの主要事業である公開（中でも展示事業）においては、展示室という空間で展開されることが大半である。

しかし、湯水のごとく経費を費やしても、どれほど精巧に標本やジオラマを制作し、展示造作を作り込もうとも、それらは疑似空間の範疇をでるものでは無い。つまり、“ 偽物 ” である。

であるならば、“ 本物 ” を第一義として活用すべきだろう。

言うまでも無く、フィールド自体が本物であり、そこに存在するもの全てが “ 活きた実物 ” である。そしてこれは、自然誌系、人文系問わず言えることである。箱物ミュージアムを否定するつもりも旧態依然の形態と非難するつもりも無いが、ミュージアム・マネージメントの一研究者として、これからの新たなミュージアム形態は “ フィールド・ミュージアム ” であると明確に提言する！

（4）地域の活性化と地域文化創出・発展が体現するもの

（1）～（3）章において**「地域の核となる博物館～それを実現する資質能力」**の根底となるカテゴリーの提起とその内容、そして、それらを体現する手法としてフィールド・ミュージアムの有効性を論じた。

当章は、当論文のまとめとして、フィールド・ミュージアムの展開が地域の活性化と地域文化創出・発展にいかに作用するかについて提言を含めて論じることとする。

まず、主体となるフィールド・ミュージアムを定義しよう。

フィールド・ミュージアムは単に活動の場をフィールドに置けば良いのでは無い。活動の場をフィールドに置くだけでは、自然観察会や歴史・文化財見学会等と何ら変わりない。フィールド・ミュージアムは文字通りフィールドをミュージアムと位置づけるわけだが、そこには、モノや情報の収集、調査・研究、学び、感動、知的欲求、情報発信等のミュージアムの全領域において、ミュージアムとフィールドが所在する地域・市民とが密接にリンクしていることが前提となる。

つまり、フィールド・ミュージアムはミュージアム側のみの展開では成立しえない。

“ ①地域の自然・歴史・文化資産 ” と “ ②それらを調査・研究対象としているミュージアムの

研究者”、そして、“③そのフィールドを生活･生計の場としている市民（地域）”とが一体となって初めて成立するミュージアム形態である。

上述したとおり、フィールド・ミュージアム自体を上手に機能させることができれば、それだけで地域の活性化と地域文化創出・発展を体現することができるわけである。

しかし、体現することが可能と言いながら、実態はそう簡単では無い。体現するにはいくつかの能力と実施手法が必要である。そして、これが一番重要であり、かつ、フィールド･ミュージアムを成立させる際の最大のポイントと言えるのは、“関係する全ての者の意識改革”である。

まず、ミュージアム側に必要な能力はコーディネーター能力である。これは非常に重要である。フィールド・ミュージアムを具現化する際、必要不可欠と言える上述の①～③の各ファクターの間を取り持ち、この３ファクターを一体化するコーディネーター能力は、ミュージアム側に最も必要なものである。

しかし、同能力に長けている人材となると研究機関の場合、かなり希薄な状況を呈していると言わざるを得ない。つまり、ある一定の専門分野に没頭している研究者ほど、コーディネーター能力に関しては乏しい傾向にある。

次に、市民と地域に目を向けてみよう。ミュージアムを母体としてフィールド・ミュージアムを体現しようと考えた場合、活動の場はまさしくそのフィールド(地域そのもの)である。そして、そこを日常的な生活の拠点とし、その地域の自然・歴史・文化についてそれなりの知識を有しているはずの市民は、他人事では無く、むしろ、フィールド・ミュージアムの基盤を支える協働者であるという意識が重要である。上述の３ファクターの一体化がフィールド・ミュージアムを成功裏に導く重要条件だということは先に論じたが、その展開の際、ミュージアム側が主であり、市民側が従だという意識を関係者が有した段階でフィールド・ミュージアムは成立しない。

その意味からも、“関係者間の意識改革”は最優先課題なのである。研究者よ！市民よ！「あいつが勝手にやっているから任せておけば良い」的な第三者意識からは即刻逸脱せよ！

それではここで、フィールド・ミュージアムの展開が地域の活性化と地域文化創出・発展にいかに作用するかについて論じるとともに、フィールドにある“本物”の持つ偉大さと何物にも代えられないその優位性を提言しよう。

既に、当論文をここまで読み続けている諸氏には、“フィールド・ミュージアムの展開が地域の活性化と地域文化創出・発展にいかに作用するか”の答えは自ずと見えているはず！である。上述したとおり、フィールド・ミュージアムは、“地域の自然・歴史・文化資産”、“それらを調査・研究対象としているミュージアムの研究者”、“そのフィールドを生活・生計の場としている市民（地域）”とが一体となって初めて成立するミュージアム形態であると定義した。であるならば、このミュージアム形態が成立していること＝地域の活性化と地域文化創出・発展が体現されていると言っても過言では無いことは自明の理である。くどくど繰り返して論じる必要は全く無いであろう。

続いて、ミュージアムにとっては、フィールド・ミュージアムの語彙のごとく、フィールド

を利活用することは、そこにある“本物”を利活用することである。

ここで、一般的なミュージアムの展示をイメージしてほしい。経費をかければ、展示業者に研究者の展示イメージを伝え、今、考え得る最先端の技法を導入し、コンピューターグラフィック（CG）や、詳細なジオラマ等で自然環境や建造物等を再現することはたやすい。さらに、昨今では 3D やプロジェクションマッピング（PM）等の活用も積極的だ。正に、展示にかける経費の大小が展示の見た目を左右すると言っても過言では無い。つまり、豊富な資金を投じさえすれば、いかにも経費のかかった展示を演出することは可能だ。

しかし、それはその展示手法が学術研究機関としての展示となっているか、見る側の立場に立った展示となっているかの評価とは別次元である。

こういった展示の最大の欠点は、見る側に“偽りの学びと感動”を提供してしまう懸念が多分にあることである。“偽り”と論じてしまうと、大いに同業者の批判を買うことになるだろうが、言い換えると“真の学びと感動”では無い（には成り得ない）と言うことである。

フィールドでサンプリングした動植物、岩石化石は標本として加工し、グラフィックやジオラマとともに展示室内に造作され、さらに CG や PM が加わる。これはこれで非常に分かりやすく、教育的効果も期待できる展示手法であることには間違いない。この手法を全面的に否定するつもりは無いが、どれだけ経費をかけて造作したとしても、それは自然の一部を切り取って展示室内に擬似的な自然環境を再現しているに過ぎない。本来、動植物は自然の中に生息しているものであり、また、岩石や化石は地球のダイナミズムを地表に表し、過去の生物が生きていた環境の証を記録として残しているものである。であるならば、その“本物”を利活用しない手は無い。

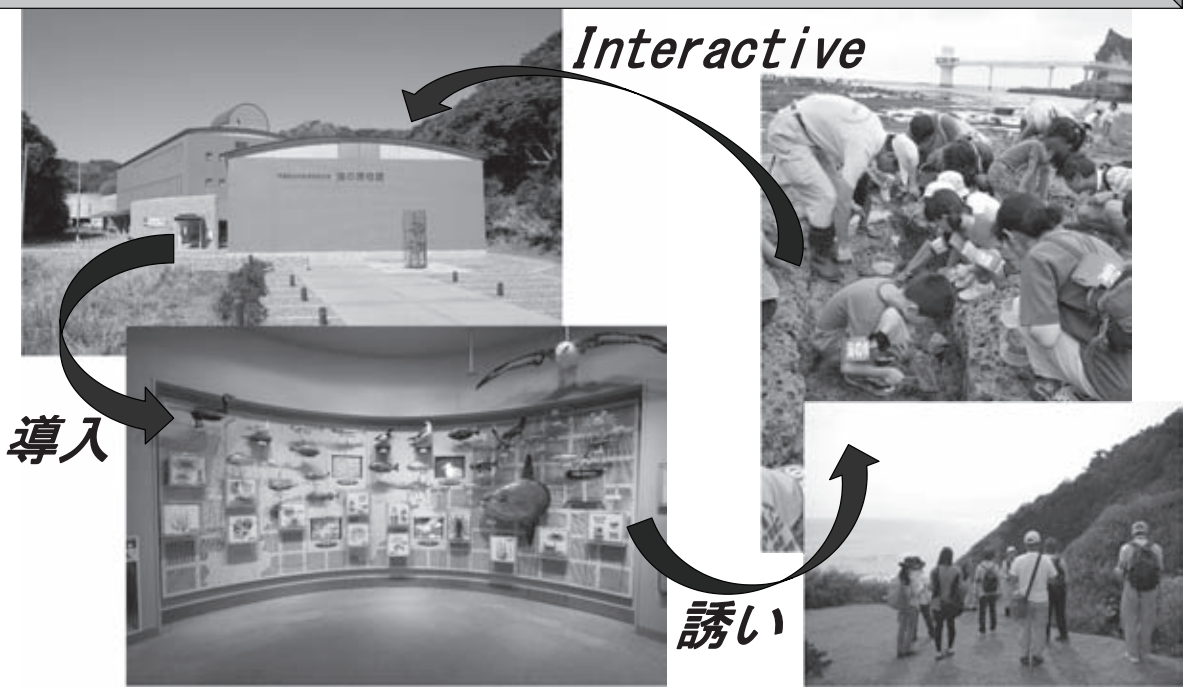
言うまでも無く、フィールドは研究者の調査研究の場であると同時に、万人にとって“学びと感動の場”であることは自明の理である。

研究者よ！展示室を抜け出してフィールドに出よ！ただし、展示室を捨てる必要は無い。

展示室はフィールドへの誘いの場。そして、フィールドは学びと感動を深める場。この両者を Interactive にリンクさせることが重要であり、研究者はそのコーディネーターとしてのミッションを兼ね備えれば良い。そしてこれらの Interactive な関係は、地域の活性化と地域文化創出・発展に寄与するとともに、ミュージアム・リテラシーの向上につながることは明白である。

海の博物館”は,

「展示室・研究者における導入」 → 「フィールドへの誘い」 → 「本物による学び」
→ 「新たな発見と研究課題創出」 → 「展示・研究者のさらなる活用」 → ・・・・・・・
を体現しているフィールド・ミュージアム.



房総のフィールドミュージアム事業
「三島小学校教室博物館」,「山の学校」,「おばあちゃんの畑」等
“フィールド全体がミュージアム・・・学びの場“
フィールド自体が展示資料である.
→日々変わる展示, 季節毎の展示(自然・習俗・習慣・文化等)